治療師のいない日

「カラタ姉さん、こんにちは」
リタは久しぶりにカラタ姉さんの家を訪ねた。
隣の村で病人が出たというので、治療師は呼ばれて行ってしまった。簡単な怪我くらいならリタでも治せるだろうからと、リタを村に残して行ったのだ。けれど治療師は、一日で戻るから、休みだと思いなさいと言っていた。
「そうね、リタの顔を見るのは久しぶりだわね」
リタはお母さんに焼いてもらったお菓子をカラタ姉さんに渡した。
「今日はお話を聞かせてもらおうと思って」
「ありがとう。もうお話のことは忘れたのかと思ったわ。大人はお話なんか聞くものじゃないなんて言う人もいるから。リタももう大人になるから」
リタは大な身振りで否定した。
「あたしはまだ子供だし、大人になってもお話は聞きたいわ」
カラタ姉さんはやさしく微笑んだ。
「さあ、どうかしらね。きっと、そう思っていない人もいるわよ」

「そんな人いても関係ないわ」
「まあいいわ。今日のお菓子は何かしら？」
「木の実づくしのケーキだって」
ケーキの入った籠に掛けてあった被いを取ると、ブルーベリー、ブラックベリー、ラズベリーがきれいに並んだ丸いケーキが現れた。
「おいしそうだこと。すぐにお茶をいれるわね」
カラタ姉さんが台所に行くと、リタも一緒に台所に行った。
「あたしね、なんだかお客様が出来なくなってしまったの。一日中治療師のお世話をしているものだから、座ってお給仕を待っていられないの」
「あら、まあ。それは変な癖を身につけたものね」
カラタ姉さんがお湯を沸かしているあいだに、リタはケーキを切った。
「せっかくリタが聞きに来てくれたのだから、今考えているお話をしようか。まだ出来上がっていないのだけれど、一緒に考えてくれると嬉しいわ」
カラタ姉さんはお茶を茶碗に注ぎながら、そう言った。
「お話って、みんな昔からあるものだと思っていたわ。出来かけのお話なんて、聞かせてもら

える人はきっとあまりいないわね」
　リタはなんだかわくわくして来た。鍛冶小屋でお父さんが、鉄の道具を作り出す過程を見ている時も、溶けた鉄の塊からいつのまにか見慣れた道具が出来て行く様子は見ていて飽きない。
　形のないお話がどんな風に出来て行くのか、リタはとても興味があった。きっとどきどきするような体験に違いない。
「じゃあ、話すわね」
　そう言ってカラタ姉さんは話しはじめたが、いつものお話とはずいぶん様子が違う。

「これはドラゴンに生贄を捧げるという話なの」
「悪いドラゴンなの？」
「ふふ、それはまだ内緒。でも、ドラゴンは人間の言葉を喋らないから、そして人間はドラゴンの言葉を理解出来ないから、ドラゴンが生贄を差し出せって言ったわけじゃないのは確かなのよ」
「そうよね、じゃあどうして生贄を捧げるといいなんて考えたのかしら」
「それはね、まあいろいろあるんだけど、ひとつにはこちらの大切なものをあげたら、神様は願

いを聞いてくれるというように考えたのね。それで、何が一番大切かと考えると、自分の子供が一番大切だからそれを神様に捧げようと考えた人がいたんだと思うわ」
「そんな考え、間違っていると思うわ」
「そうね、でもお話の中の人間はよく間違った考えを持ったり、間違った行動をしたりするものなのよ。現実の人間と同じようにね」
「誰が生贄になるの？」
「それなのよ、王様が生贄になる女の子をある村から選び出すように命令するのよ。それで、生贄になるのは美しい女の子でなければならいの。ところが、誰も自分の娘を生贄にしたいとは思わないのよね」
「そうよね、それは誰だって嫌だわ」
「でも、ドラゴンは暴れているの。その、今のところ人を襲ったりはしていないのだけれど、畑の作物を食べたり、飼っている山羊を襲ったりしているのよ。それで、王様の兵隊がドラゴンをやっつけようとするのだけれど、ドラゴンは、矢が当っても、槍が刺さっても、剣で切って平気なのよ」
「ドラゴンだものね。簡単にはやられないのだわ」

「そうなの、兵隊ではドラゴンを殺せないとわかって、王様も他に仕方がなくて、生贄を捧げることにしたのよ。人が襲われる前に、生贄を捧げて、それでドラゴンが暴れるのをやめてくれればいいと思ったの」
「うーん、すごく悪い王様っていう訳でもないのね」
「そうなのよ。ちょっと複雑なお話にしようと思って」
「そして、いい王様っていう訳でもないのね」
「そういうこと。それで生贄を出せと言われた村では……。あら、どの村から生贄を出すかはどうやって決めたのかしらね。そうだわ、いっそのことすべての村からひとりずつ生贄を出すように、王様が命令したことにするわ。それなら不公平がないもの」
「それじゃあ、ちょっと多すぎるんじゃないかしら。その王様の領地にどれだけの村があったのかわからないけれど」
「そうね、それじゃあ、それぞれの村から一番の美人を出させて、その美人たちの中でも一番の美人を生贄にするって決めたらどうかしら。でも、そんなに美人が集まっているところを見た

ら、王様も何か悪いことを考えるかも知れないわね。一番の美人は自分のものにしようとか」
「それじゃあ、悪い王様になるわよ」
「じゃあ、一番は生贄にして、二番を自分のものに……」
「それだって、悪い王様だと思うけれど」
「でも、さっき程じゃないわよ。それで、ある村でも誰を生贄に、つまり、村一番の美人に決めるかということになるの。でも、誰が美人かということは簡単には決められないわよ。わかるでしょ」
「そうね、難しい問題だわ」
「それに誰も村一番の美人にはなりたくないの。そうね、王様はおふれではみんな生贄になるようなことを言っておくのだわ。あとになって、生贄は一人だけにしたと言えば、みんなが喜んで王様の人気も上がるからよ。だから、村一番の美人に選ばれると生贄になると村人は思っているのよ」
「それに、生贄にされるよりは、王様のものになった方がましだと思う女の子もいるわね、きっと」
「そう、そう。きっと大喜びしちゃうわね。でもその時になるまでは知らないのよ」

「悪賢い王様なんだわ」
「そうかも知れないわね。それで、その村には年頃の娘で美人といえるような人はそんなに多くはなかったの。その一人は村長の娘だったのよ。美人っていうのは顔だちや体形もあるけれど、やはり小奇麗な服を着ていたりするとそう見えるものなの。少なくとも、ボロボロの服を着ていたのではあまり美人には見えないのよ。村長はどうしても自分の娘だけは生贄にしたくなかったの。そこで村長は考えたのよ」
「他の娘にもきれいな服をあげたのね」
「そうなの、娘の服を他の村の娘たちにあげただけでなく、特にきれいな村娘には新しく服を仕立ててあげたのよ。こういう時でなければ、娘たちは大喜びだったでしょうね。でも、絶対一番の美人にはなりっこないって信じている娘は単純に服を貰えて喜んでいたわ」
「それで別の娘が選ばれたの？」
「ところが、服ばかりきれいにしても、野良仕事をしたり、洗濯をしたりしていたのでは、日に焼けているし、手も荒れているでしょ。服がきれいになるとそのへんが目立つのよ。村長の娘は大事に育てられて野良仕事も洗濯も全然して

いなかったので、肌もきれいだったのね」
「わかったわ。きっと村長は白粉をみんなにあげたのね」
「そうなの、白粉や手あれを治すクリームなんかを村の娘たちにあげたのよ」
「そうしたら、どうなったの」
「そうしたら、こんどはようやく顔だちや体形が比較されるようになったのよ。ところで、村長はやはり村では数少ないお金持ちだし、尊敬される役でもあるわよね。だから、村長がお嫁さんを貰う時も、たくさんの女性の中から美人を選ぶことが出来たのよ。それで村長の奥さんも美人だったの。そして、村長の娘はやはり奥さんの血をひいていたのね。顔だちも体形も他の村娘よりずっと優れていたのよ」
「じゃあ、白粉やクリームを貰った村の娘たちは大喜びね」
「そのとおりよ。それでも村長は諦めなかったのよ。娘を生贄にするのはどうしても嫌だったの。それに村長としての立場を守るためにはどうしても自分の娘より美しい村娘が必要だったのね」
「まあ、でも、もう何も思い付かないわ。もしかして、男の人の中に美人がいたりして」

「そうね、もし男の人が女装して生贄になるのだったら、きっとその男の人はドラゴンを退治してしまうわね。でも、これはそういう話じゃないの」
「じゃあ、もう本当に何も思い付かないわ。すごく意外な展開があるのね」
「ううん、そうじゃないの。実はまだ話していなかったことがあるのよ。以前はその村に村長の娘と並ぶほどの美しい娘がいたの」
「まあ、死んじゃった人を生き返らせるのかしら。確かに一度死んだ人なら生贄になっても誰も悲しまないでしょうね。でも、せっかく生き返ったのにすぐに生贄にされるのは可哀想な気もするわ」
「その娘は死んだわけじゃないの。顔に傷を負ったのよ」
「あたしみたいに？」
「そうなの。このお話の女の子はね、リタ、あなたを元にして考えたのよ」
「なんだか恥ずかしいわ。それにあたしは怪我をする前から、そんなに美人じゃなかったわよ」
「そんなことないわよ。それにお話なんだから、違うところもあっていいの」

「わかったわ、お話に出てくる子はみんな美人だものね」
「その娘の名前は、そうね、リラにするわね。リラは以前は村長の娘と並び称されるくらいの美人だったの。けれど、リラの家に泥棒の一味が入ったのね。泥棒というより強盗だったの。それで、リラの両親は殺されてしまうの。そして、リラも殺されそうになるのだけれど、泥棒の親分がリラの美しさに気がついて、乱暴しようとするの」
「それがあたしなの？　ひどいわ」
「親分はナイフでリラを脅すのよ。でも、乱暴しようとした時、リラはナイフを恐れずに暴れるの。それで、ナイフで眼を切られてしまうの。でも、親分はリラがあんまり暴れるので乱暴するのをあきらめて引き上げるの」
「ああ、よかった。でも、お父さんもお母さんも殺されてしまったのね。でも、リラはそれからどうやって生活していったのかしら」
「そうね、そこまでは考えていなかったわ。じゃあね、こうしようかしら。両親は殺されてしまったけれど、リラは怪我をしていたので、村人が治療師を呼んでくれたのよ。それでリラは治療師

に怪我の手当てをしてもらうの。けれど、リラの家のお金は全部泥棒が持って行ってしまったから、リラはお金を払えないのよ。それで、支払いの代わりに治療師の身の回りの世話をするように、リラに言うのよ」
「まあ、治療師がリラを引き取ってくれたのね。やさしい治療師だわ」
「治療師はリラに恩義を感じて欲しくなかったのね。だから、支払いの代わりだと言って身の回りの世話をさせたのよ。そう、でもそれが問題になるのだわ」
「えっ、どうして問題なの？」
「それはね、治療師はリラを養子にしなかったので、リラのことにあまり口を出せなくなってしまったの。ふだんならいいんだけど、例えば、リラを生贄に選ぶとかいう時にね」
「あっ、すっかり忘れていたわ。でも、リラは眼がつぶれていたんでしょ。片目だけなの？」
「そう、あなたと同じように片方の目が見えなかったのよ。それでね、村長はきれいな服とかお白いとかで村の娘を美人に見せようとしたでしょ。今度は、リラの白い眼の見栄えをよくするためにね、目蓋を縫い付けるように言うのよ、

治療師にね」
「ひどい、治療師はそんなこと絶対にしないわよ」
「リタ、これはお話なのよ」
「お話でも、治療師はそんなことしないわ」
「リラを助けるためなのよ」
「えっ!?」
「目蓋を縫い付けるくらい治療師でなくても出来るでしょ。きっとずっと痛いでしょうけれど。それに治療師には考えがあったのよ。でも、リラは治療師の考えをまだ知らなかったの」
「リラはすごく悲しんだと思うわ」
「そうなの。でもリラは我慢強い娘だったから、悲しみを顔に表さなかったのよ。ただ、治療師がリラの目蓋を縫い付けた時、針で刺したところから血が一滴出て来て、リラの頬を流れ落ちたの」
「それが涙の代わりなのね」
「それから、もちろんリラにもきれいな服を着せて、白粉やクリームを塗ったりしたのよ。そうしたら、まあどうでしょう、村長の娘よりもリラの方がきれいになってしまったのよ」
「そんなことがあるかしら?」
「リタは知っているかしら? 異国の風習で、こ

う片目をつむる仕草を。何かちょっとしたいたずらをした時とか、男の子が女の子を誘ったり、その逆に女の子が男の子を誘ったりする時にする仕草なのよ。あたしは上手に出来ないのだけれど、とっても魅力的な仕草だそうよ。リラは目蓋を縫い付けたのでいつでもその仕草をしているように見えたの」

「それでリラは生贄になってしまうの？」

「リラは村一番の美人として王様のもとに送られることになるの。きれいな馬車に乗って王様のところに行くのよ。もちろん、村長や村人が護衛についてね。ところで、その馬車に乗る前に、治療師がリラにお薬を渡すのよ。縫い付けたところから膿が出るといけないから、この薬を持って行きなさいって」

「いっそ膿でも出て来た方がいいんだわ」

「リラもそう思ったのね。でも、そのお薬は膿を止める薬ではなかったの。リラは治療師のところで働いていたから知っていたのだけれど、それは人や動物をぐっすりと眠らせてしまう眠り薬だったのよ」

「わかったわ、それが治療師のたくらみだったのね」

「そうなの、リラにも治療師の考えがようやくわかったのよ。そうすると、どんなにつらくても出なかった涙がリラの眼から流れ落ちるの」
「そうよね、そのとおりだわ」
リタはなんだかお話の中のリラの気持ちになってしまって、涙ぐんできた。
「でもリラは考えたの。このお薬を使って、護衛の人たちを眠らせることは出来るけれど、そんなことをしたら、治療師が疑われるのじゃないかって。それに生贄を送らなかったら、村に王様のお咎めがあるでしょ。そこで、リラはお薬は使わずに王様のところまで行ったのよ。よその村の娘はきっとリラよりも美人に違いないとも思ったのね」
「そうよね、眠り薬はあとで使ってもいいんだもの」
「やがて馬車はお城に着くの。そしてお城の広間に村から来た娘たちが集められるのよ。そして王様がどの娘が一番美しいか見てまわるのよ。でも村で一番の美人というだけあって、どの娘も美しいのよ」
「でもきっとリラよりも美しい娘もいたに違いないわ」

「そうかも知れないけれど、集められた娘たちはみんな生贄にされると思っていたから泣いていたの。そして、知っていると思うけれど、泣き顔というのはあまり美しいものじゃないわ。それに白粉も流れてしまうしね」
「リラは泣いていなかったのね」
「そうよ、リラは泣いていなかったの。なぜならリラは生贄にされるよりもっと悲しい想いをしていたから。それは両親が泥棒に殺されたこともそうだったし、治療師に裏切られたと思ったこともそうだったの。それに、実は治療師には裏切られた訳じゃないとわかってからは、生贄なんて重要なことではなくなっていたのね」
「そうかも知れないわね。それに、もともと我慢強い娘だったんでしょ」
「そう、それもあったわね。それにリラはとてもやさしい娘だったのよ。まわりの娘たちが泣いているのを見ると、なんとか力になってあげたいと思ったの」
「泣き声がうるさかっただけかも知れないわ」
「王様はリラに目を留めて、不思議な美しさを持った娘だと思ったの。でも、もちろんリラの片方の目が縫い付けられていることは気がつい

たの。それから、娘たちに向かってこう言うの。泣くのを止めなさい、こんなに大勢ではドラゴンだって食べきれないだろう、生贄は一番きれいな娘だけにするって」
「それで泣きやんだのかしら」
「一度泣き出したら、簡単には泣きやまないものよ。それに、みんな村一番の美人だったから、うぬぼれもあったのね、自分が領地内でも一番の美人だと思っていたのよ」
「いいわ、あたしが生贄になるわ。リラがそう言うのよ。それで王様もリラを生贄にするの。だって、誰を生贄に選んでも、その娘の両親や村から恨まれるでしょ。でも、本人がそうしたいって言ったのなら恨まれることはないと思ったの」
「それに生贄になりたいという娘がいるのに他の娘を生贄に選んだら揉めるものね」
「でも王様は少し迷ったのよ、生贄になるのは大切なものでなければならないから、病人や怪我人はよくないという考えがあるの。でも別の考えもあって、それは生贄は自分から望んでなるものが最上であるという考えなのよ」
「結局、リラが生贄になるのね。そういう運命なのね」

「だって主人公なんだもの、仕方がないわ」
「わかったわ、続けてね」
「その頃、ドラゴンはどうしていたかというと、ここ数日はある山の中にある洞窟に閉じこもっていたの。それでその洞窟の入り口を王様の兵隊が取り囲んで見張っていたのだけれど、全然中から出て来ないのよ。それでもう死んでしまったのではないか、剣や槍の傷が後から効いてきたのではないかという説も出たのだけれど、洞窟の入り口から中の様子を窺うと、ドラゴンの寝息のようなものが聞こえるの。少なくとも死んでいないことは確かだったのよ」
「でも、ドラゴンって一度眠ると何十年も何千年も眠るのじゃないの？」
「それはわからないわ。一度にたくさん眠ることもあるかも知れないけれど、ちょっと居眠りすることだってあるでしょ。ドラゴンがいつ目覚めるか誰にもわからなかったの」
「ドラゴンが居眠りするとは思わなかったわ」
「とにかく、ドラゴンの居場所はわかっていたので、そこに生贄のリラを運んだのよ。そうね、やっぱり生贄には立派な服を着せたのよ。そうだわ、その国では生贄をドラゴンの花嫁と呼ぶ

ことになっていたの。それで年頃の美しい未婚の女性である必要があったのね」
「花婿は花嫁を食べたりしないと思うわ」
「とにかく、そう呼ぶことになっていたのよ。それでリラは花嫁衣裳を着せられるの。それも王家の花嫁衣裳よ。王様は立派な生贄を捧げたっていうことをみんなに示したかったのよ。それで本当に立派な衣装を仕立てさせたのよ」
「それにきっと王家の白粉と王家の手荒れクリームね。王家に手荒れクリームなんてものが必要かどうか知らないけれど」
「そうね、それに楽隊の演奏つきの行列で、お城を出てドラゴンのいる洞窟に向かったのよ。でも、楽隊はドラゴンを起してしまうといけないというので途中で帰ったわ。そして、リラはドラゴンの洞窟に入れられるの。リラが洞窟に入ると、王様の兵隊たちは大きな石を積み上げて洞窟の入り口を閉ざしてしまうの」
「そんなことができるなら、リラを入れずに入り口を閉ざせばいいのに」
「大きな石と言っても、人が運べるような石ではドラゴンの妨げにはならないわ。入り口を閉ざしたのはリラが逃げないようによ」

「そんなことしなくても、リラは逃げたりしないわよね」
「きっとそうね。でも、生贄に自分からなりたいなんていう娘がいるとは思わなかったから、石を積むことは前から決まっていたのよ。そして、入り口に石を積み上げたので、それでなくても暗い洞窟の中は真っ暗になってしまったのよ。その中にリラは取り残されたの」
「きっと心細いに違いないわ」
「そうね、けれども少しするとリラの目が闇になれてきて、少しずつ周りの様子が見えるようになって来たの。それに、石を積み上げた隙間から、少しだけ外の光が差し込んでいたのよ」
「じゃあ、外から空気も流れてきていたのね」
「そうよ。目が闇になれてくると、リラはドラゴンはどこにいるのかと探し始めたの。ドラゴンに会うのは気が進まなかったけれど、生贄としての役目もあるし、それに、ドラゴンの方から見つけられるよりは、先にドラゴンを見つけた方がいいと思ったのよ」
「とっても勇気があると思うわ。あたしには無理ね」
「あたりは暗かったし、洞窟は枝分かれしてい

たのだけれど、リラにもドラゴンの寝息のような音が聞こえたので、そちらに向かって歩いて行くと、洞窟の行き止まりにドラゴンが寝ていたの」
「寝ている隙にそっと引き返したいわ」
「ドラゴンはリラが今までに見たことのある動物の中で一番大きかったのよ。そうね、牛の十頭分くらいの大きさはあるのよ」
「あら、そんなものなの。意外に小さいわね」
「リラはそうは思わなかったわ。でもあまり怖いとも思わなかったの。なぜなら、リラは治療師のお世話をしている時に、大きな雄牛を抑えたり、牡豚をなだめたりとかそういう役目もしていたからよ。それに、眠っている動物ってかわいいものでしょ」
「そうかしら？　うーん、そうかも知れないわね」
「それだけじゃなかったの。ドラゴンの体にはたくさんの矢が刺さっていたのよ。それに槍も一本刺さったままだったの。その他に切り傷がたくさんあったのよ。リラはやさしい娘だったし、治療師の手伝いもしていたから、放っておけないと思ったの」
「まあ、そんな話だったの」

「実はそうなのよ。リラは一本ずつ矢を抜いてあげて、折れた槍もなんとか力を込めて抜いたの。槍を抜いた時は、ドラゴンが身じろぎしたので、リラはびっくりしたけれど、ドラゴンはそのまま起きなかったのよ」
「でも何も持っていないんじゃ、あまり手当ては出来なかったわね」
「そうね、それじゃあ、こうするのはどうかしら。前に治療師がリラに膿が出ないようにするお薬と言って、眠り薬を渡したといったけれど、そうじゃなくて、両方のお薬を渡したことにするの。人間の薬がドラゴンに効くかどうか分からないけれど、お話だからいいのよ」
「それならいいわね。ドラゴンはリラに感謝して食べないことにするのね」
「ふふ、残念ながらそうじゃないのよ」
「えー、違うの？　食べられちゃうの？」
「ちょっとお腹が空いてきたから、お話を中断してケーキを食べることに専念するわ」
「ひどいわ。そうだわ、これがサラの言っていた意地悪なカラタ姉さんなのね」
「ああおいしい。あら、中にはイチゴのジャムが入っているのね。ほんとに木の実づくしだわ」

「ねえ、リラは食べられちゃうの？　そんなことないよね」
「リラはね、ドラゴンの傷の手当てを終えると、疲れて眠り込んでしまうの。だってドラゴンはとても大きいし、傷の数も多かったからね。そして目覚めると、すごくお腹が空いていることに気がつくの」
「ドラゴンもお腹が空いていたのかしら、そっちの方が心配だわ」
「その時、ドラゴンが卵を産み落とすのよ。それが意味することは二つあったの。その一つは、ドラゴンがメスだったということよ」
「あら、考えてもみなかったわ。じゃあ、王様はドラゴンの花嫁じゃなくて、ドラゴンの花婿を選ぶべきだったのね。領地の村の中から一番の美男子を集めるべきだったんだわ。そしてきれいな花婿衣装を着せるのよ」
「それもいいわね。お城の広間にはずらりと美男子が勢揃い。きっと男の子だから泣かないわね。けれども、もうひとつ意味することを言わないといけないわね。それはドラゴンが目を覚ましていたということ」
「そっちを先に言って欲しかったわ」

「リラがそのことに気付いて見上げると、ドラゴンもリラを見下ろしていたのよ」
「どんな様子だったの？　怒っていたの？　感謝していたの？　それともおいしそうな餌だという顔をしていたの？」
「ドラゴンはおかしいなぁ、変だなぁ、何か違うなぁという顔をしていたのよ」
「どういうことかしら。ドラゴンは何を期待していたのかしら」
「その時、ドラゴンのお腹の下から、小さな赤ちゃんドラゴンが這い出してくるの。そしてミー、ミーとかわいい声で鳴くのよ。そうすると親ドラゴンは、まだ卵の殻の付いていて濡れた赤ちゃんドラゴンを舐めてきれいにしてあげるの。それから、生んだばかりの卵を赤ちゃんドラゴンの前に持って来て、鉤爪で卵に穴を開けるの、そうすると、赤ちゃんドラゴンは穴から卵を飲みはじめるのよ」
「どういうことかしら？　あたしわかんないわ」
「そうなの、ここが難しいところなのよね。とりあえず、説明を聞いてちょうだいね。あたしたち人間はお乳で赤ちゃんを育てるわよね。そして鳥やトカゲは卵を産むのよね。ドラゴンはトカ

ゲに近いところがあるけれど、でもとても賢くて人間に近いところもあるのよ。それでドラゴンは卵を生んで、お乳の代わりに卵で赤ちゃんを育てるの」
「でもそれじゃあ兄弟を食べるのと同じことじゃないの」
「そうじゃないのよ。鶏は知っているわよね。雌鶏は雄鶏と番わなくても卵を生むって知ってるかしら。そういう卵は孵らないの。ドラゴンの生む卵も孵るのは最初の一個だけで、お乳の代わりに生む卵は孵らない卵なのよ」
「なんだか難しいわ」
「そうなの、ここのところをどう話すか、ずっと迷っているのよ」
「でもどうやってドラゴンの子育てなんてことを知ったの？」
「あたしが考えたのよ。ここでリラを助けるためにね」
「だったら、卵で生んでお乳で育てる方がわかりやすいわよ」
「でも、ドラゴンにおっぱいがあるなんて、みんなのドラゴンに対するイメージが壊れてしまうわ」

「鱗の下に隠れているのよ」
「じゃあ、そのへんはあとで考えるわ。ともかくリラは赤ちゃんドラゴンと一緒に面倒を見てもらうの。お乳を飲むのか、卵を食べるのか、それは後回しにするわね」
「お乳の方がいいわよ。生卵はきらいだわ」
「それは考えてあるのよ、つまりドラゴンは火を吹くから、卵焼きは作れるわ」
「じゃあ、どっちでもいいわ」
「それから、ドラゴンが畑を荒らしたり、家畜を襲ったりしたのは卵を生んだり、赤ちゃんを育てたりする栄養を取るためだったのよ」
「いいこととは言えないけれど、あまり責めることもできないわね」
「そしてお母さんドラゴンは一年間洞窟の中で赤ちゃんドラゴンを育てるの。リラも一緒にね。赤ちゃんドラゴンは、生まれた時の大きさは仔犬くらいだったのだけれど、だんだん大きくなって仔馬くらいの大きさになり、一年後には馬くらいの大きさになるのよ」
「リラも一年間ずっと洞窟の中だったの？　食べ物はあっても退屈しちゃうわよ」
「そんなことはないわ。だって、やんちゃな赤

ちゃんドラゴンが一緒だったもの。退屈する暇なんて全然ないのよ。赤ちゃんドラゴンはリラをお姉さんのように思ってしまうの。だって一緒にお母さんのお乳を飲んだら兄弟だもの。えーと、卵を一緒に食べても同じことよ。それで、リラも赤ちゃんドラゴンにいろいろ話しかけるのよ。別に言葉を教えるとかそういう意味ではなくて、単にペットや家畜に話しかけるようなものよ。でも、それよりは親しみを込めたかも知れないけれど。でもね、ドラゴンはすごく頭がいいのよ。だから、この赤ちゃんドラゴンは人間の言葉を覚えてしまうの」

「まあ、それでどうなるの？」

「でも、それはまた別のお話ね。そしてリラもドラゴンのお乳を飲んだために、あるいはドラゴンの卵を食べたせいで、特別な力が身につくのよ」

「まあ、すごい」

「でも、それはまた別のお話ね」

「もう、そればっかりね」

「とにかく、一年後よ。赤ちゃんドラゴンの巣立ちの時が来たの。お母さんドラゴンは洞窟の入り口に積み上げてあった石をバーンと蹴飛ば

して外に出ると、翼を広げるの。洞窟の中にいた時はわからなかったけれど、翼はとても大きいのよ。実際、ドラゴンの体のほとんどは翼なのよ。そして赤ちゃんドラゴンも翼を広げるの。そしてリラも外の新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込むために両手を広げて息を吸い込むのよ」

「三人だか三匹だかが並ぶのね」

「そう、時は夕暮れ時で、三つの影が長く伸びるの。それからお母さんドラゴンはおもむろに羽ばたいて、空に飛び上がるのよ。それに続いて赤ちゃんドラゴンがまねして羽ばたくの。最初は少し風によろけたりしているのだけれど、やがて力強く羽ばたいて、お母さんドラゴンに並んで飛ぶのよ。二匹はしばらく旋回して、リラが飛んでくるのを待っているの」

「でもそれは無理よね」

「それでお母さんドラゴンが降りてくるのだけれど、その羽ばたきが強くてリラは吹き飛ばされそうになるの。今度は赤ちゃんドラゴンが降りて来たので、リラはその背に乗って空に舞い上がるのよ。空からみると、村や畑や家がとても小さく見えるのよ。二匹はしばらく一緒に飛んでいたのだけれど、やがて別れて違う方向に

向かうのよ。リラを乗せた赤ちゃんドラゴンは、リラの故郷の村の方に飛んでくれるの」
「でも、ドラゴンが現れたらみんな驚くんじゃないの」
「夕闇に紛れて近くの森に降りて、そこからリラは歩いて治療師の家に帰るのよ。治療師はリラの顔をみてビックリして、それから喜んでくれるの。おしまい」
「まあ、でも赤ちゃんドラゴンとリラは仲良しなんでしょ。赤ちゃんドラゴンはそれからどうなるの？」
「それはまた別のお話ね」

「もっと話してー」
リタはふざけてカラタ姉さんに迫った。
「おしまい、おしまーい」
カラタ姉さんも一緒になってふざけて逃げ回った。
「あ、あたし大切なことを忘れていたわ」
「なに？」
「あたしこの頃文字の書き方を習ったから、お話を聞いてそれを書いてみようと思ったの。でも、すっかり忘れていたわ」

「駄目よ。お話は話すからお話なのよ。書いたら駄目よ」
「そうかしら、きっと素晴らしいと思うわ」
「あのね、リタ。お話は聞き手の様子や話し手の調子やそういうもので毎回違うのよ。話すたびに変るからいいんじゃないの。さっきの話だって、これから人に話すたびにどんどん変っていくのよ。そうやって枝葉がついたり、余分なところが取れたりして面白い話になっていくの。書いちゃったら変らないじゃないの。変らないお話なんて死んだお話よ」
「そうかぁ、そうかも知れないわね」
「それより、もうお昼になるけれど、どうする？午後にはサラも来るのだけれど、お昼食べていかない？　それとも、お昼は家族で食べる約束をしているのかしら」
「あっ、あたしお母さんとお父さんとお昼を食べるつもりだったのだけれど、でも、何も言わずに出て来ちゃったわ。なんだか、治療師の見習いって秘密が多いでしょ。お母さんと話すことが少なくなってしまって、今朝もつい言い忘れてしまったの。それが最大の問題よね」
「それなら食べていきなさいよ。というか、作っ

てくれる？　あたしは料理が得意じゃないから」
「はいはい、それじゃあ、カラタ姉さんのために、ドラゴン風目玉焼きでも作るわね。卵あるかしら」
「探してみて、古くなってないか確かめてね」
リタは探し出した卵を割ってからよく見て匂いも嗅いでみたが、まだ悪くはなっていないようだったので、それで目玉焼きを作った。あとはスープを温め直して、パンを切っただけである。
「これのどこがドラゴン風なのかしら？」
「えーと、焦げているところかな」
「それは単に失敗しただけでしょ」
「気にしないで。ドラゴンは細かいことは気にしないのよ」
そんなことを言いながら二人が食事をし、それから後片づけをしてから、のんびりお茶を飲んでいると、サラがやってきた。
「カラタ姉さん、こんにちは。今日もお話を習いにきたわよ。あら、リタがいるじゃないの」
サラはリタを見つけると、近づいて来た。
「もう、捕まえようとすると、何処にもいないくせに、思ってもいないところに現れるんだから」
「今日は治療師が隣の村に呼ばれて行ったから、

あたしはお休みなの」
「まあ、よかった。じゃあ、あたしの話をたっぷり聞いてもらうわよ。いいでしょ、カラタ姉さん」
「あたし、もうカラタ姉さんの新しいお話をたっぷり聞かせて貰ったの。一日に二つもお話を聞いたら、頭の中が弾けちゃうわ」
「えっ、なに？　新しい話って。もう、リタったらずるいわ。毎日のように通っているあたしが聞いていない新しい話を、たまたま来合わせただけで聞いてしまうなんて」
「リタをもとにした娘が出る話なので、リタに最初に聞いてもらったのよ」
「えっ、なにそれ？　リタをもとにした娘って何よ。そっちの方がずっとずるいわ」
「ずるくないわよ、生贄にされちゃうのよ」
「そんなこと言って、結局、素敵な王子様が助けに来るんでしょ。もう、ずるいわ、ずるいわ。その役はあたしが狙っていたのに」
「サラも自分をもとにしてお話を作ればいいんだわ」
「そんな図々しいこと出来る分けないでしょ。いいわ、こうなったら、無理にでもあたしの話を

聞いてもらうわよ。そして頭が弾けちゃえばいいんだわ」
「まあ、まあ。お話を二つや三つ聞いたくらいじゃ頭は弾けないわよ。街にいた時には、一晩中話をさせられたことがあって、喉が枯れてしまったけれど、それでも聞いていた人はなんともなかったのよ」
「それじゃあ、やっぱり、リタにはあたしの話を聞いてもらわないといけないわ」
「はい、はい。わかりました。おとなしく聞くことにするわ」
「じゃあ、まず、あたしもお茶を頂くとして……」

えーと、どこまで話したかしら？　もう相手によって話の進み具合が違うから混乱するわ。できればみんなで一緒に聞いてもらいたいものだわね。
わかったわ。サラマンダがローランドに捕まりそうになって、シーノとフィーラが救出する話までね。
あのあと、ローランドはもう頭に血が上ってしまって、どんなことをしても義賊の一味を捕まえてやるとか決意するんだけど、頭に血が上っ

たままではいい考えは浮かばないのよ。
それから乗馬をしたり剣術の稽古をしたりして気を落ち着けようとするのだけれど、なかなか落ち着かないの。そんな時、妹のローズマリーの買い物に付き合って、また市場に行くのよ。
そうすると、市場の人々がこっそりとだけれど義賊の噂話をしているのを耳にするの。あの家にはもうお金が投げ込まれたとか、あの家はまだだけれど、こっそり高利貸しをやっているのだから当然だとか。
その時、ローランドの頭に名案が浮かぶの。義賊は盗みに入る時は用心しているが、お金をばらまきに貧民街に来る時は油断しているに違いないってね。
それから毎晩、ローランドは一人で貧民街で張り込みを続けるの。古着屋で買った粗末な服を来て、肌に泥や煤をこすりつけてね。軒下で丸くなって、ほとんど乞食よね。
それからも義賊は貧民街に現れたのだけれど、なかなかローランドの見張っているところには来なかったの。貧民街の人たちもローランドが毎日夜になると、同じ軒下に来て丸まって寝ているので、どこからか乞食が流れて来たという

ように思うのよ。
「あんた、ちゃんと食ってんのかい？　よかったらこれでも食いなよ」
ローランドが目を上げると、痩せた小さなお婆ちゃんが、何かの入った器を差し出していたの。ローランドは下手に断ったら張り込みがバレると思ってその器を受け取るのよ。そして、それを飲んでみると、ほとんど実のない豆のスープなのよ。塩味だってろくに付いていないの。
最初、ローランドは乞食にあげるためにわざと薄めたスープを寄越したのかと思ったのだけれど、彼の食べる様子を覗きこんでいるお婆さんの顔を見ていると、そのスープはお婆ちゃんのその晩の食事だってことがわかるのよ。
ふと気がつくと、ローランドの頬を涙が流れ落ちていたの。すると、お婆ちゃんはそれを誤解してくれるの。
「ああ、やっぱり食べていなかったんだね。薄いスープで済まないねえ。今夜あたり義賊がお金を投げ込んでくれたら、もう少しましなものを食べさせてあげられるんだけどねぇ」
ローランドは動揺を隠すように俯いて、器を返すのよ。

「ありがとう」
「なあに困った時はお互い様さね」
でも、ローランドはそのまま張り込みを続けるのよ。頭が固いから急には考えを変えられないの。
そして、その夜更け、ローランドの見張っている地区に義賊がお金をばらまきに来るのよ。サラマンダの指示で義賊は一人ずつ分かれて一軒一軒お金を配って歩くの。
「そらよ、あんたも毛布でも買いな」
ローランドの前にも銀貨が投げられるのよ。すると、その瞬間、ローランドはがばっと起き上がって、義賊の腕を掴むの。そしてたちまち革の手枷を掛けてしまうのよ。それから、よく見ると、捕まえたのはサラマンダだったの。
「捕まえたぜ、やっぱり女だったんだな。なんだよ、あの香水は？」

サラはそこで一度話を区切った。
「ほらね、前に言ったとおり、ローランドがサラマンダを捕まえたでしょ」
サラは得意そうに言った。
「どうせまた逃げられるんでしょ」

「あたしはローランドがサラマンダを捕まえるって言ったのよ。逃げられないとは言ってないわ。でも、いいわよ。サラマンダは逃げられないって言ってあげるわ」
「はいはい。サラ、それじゃあ、やりすぎよ。気を持たせるっていうのは挑発するのとは違うのよ。ケーキでも食べて頭を冷やしなさい。お昼の後でお腹が一杯じゃなければね」
「もちろん、ケーキはいつでも食べられるわよ。これ、リタが持ってきたの？」
サラはケーキを食べて、お茶をもう一杯貰ってから、話を続けた。

「なんだよ、あの香水は？」の続きからよ。
「単純馬鹿への挨拶よ」
サラマンドラはそう答えるの。ところで、サラマンドラが女だと気付いた原因はその腕を握った時に、細さと柔らかさからわかったのよ。
「なんだと！　俺だってそう単純って訳でもないんだよ。さっき、そこの婆ちゃんからスープを貰っちまったからな」
「はっ、少しは目が覚めたかい、貴族のお坊ちゃん」
そのうち、義賊の仲間が事態に気付いて集まっ

て来たの。ローランドは囲まれてしまったけれど、サラマンダには剣を突きつけたままなのよ。それで、義賊たちは手が出せないの。

ローランドは革の手枷でサラマンダの手と自分の手を繋いでしまうの。これは丈夫な革だから剣で切るにも時間がかかるのよ。そしてサラマンダに剣を突きつけたまま、少しずつ動いて囲みから出ようとするの。

「お兄様！」

その声に驚いてローランドが見ると、ローズマリーが義賊の一人に捕まっているのよ。ローズマリーはローランドが毎晩出かけるので、逢い引きにでも行っているのかと、好奇心から跡をつけて来ていたの。

「交換だ」

義賊は言うのだけれど、ローランドには決心がつかないの。その時、騒ぎを聞きつけたのか、それとも巡回の途中だったのか、警備兵が近づいてくるのよ。

「明日の真夜中に交換だ。よく考えておけ。妹と手柄とどっちが大切か」

義賊はそう言って引き上げてしまうので、ローランドも決心がつかないまま、サラマンダを家

に連れて帰るの。